

2013年8月16日付  
「三陸新報」1面

連載

堤防とまちづくり

④

# 難航する「景観への配慮」

気仙沼市本吉町の小泉川河口は震災前、美しい田園風景が広がっていた。小泉海水浴場は環境省の「快水浴場百選」や「日本の白砂青松百選」に選ばれ、年間5万人以上の海水浴客やサーフィン愛好者でにぎわった。

陸級の津波に備え、県は海拔14・7㍎の堤防を海岸と小泉川に整備する計画を立てた。

広大な背後地は海水に漬かったままの状態。「堤防を造らなければ、田畑は荒れたまま放置される。津波でまた大きな被害を受けないためにも堤防は必要だ」と地元男性(77)。小泉川上流には津谷の市街地があり、堤防を造らなければ災害危険区域が拡大することにもなる。

方整備局は23年11月、宮城県沿岸の堤防整備を環境や景観に配慮するため、検討委員会を設置した。短期間で巨大な堤防を整備するに当たり、生態系への配慮、海岸の利便性、地域の個性に対する視点が必要だと判断したのだ。

気仙沼市内では、県内最大の堤防計画となる小泉海岸をモデル地区に選定した。海側から見た景観にも配慮し、堤防の表面処理、河川堤防の底幅は約100㍎になるもの、砂浜はできるだけ残したいという。離岸堤整備による効

り、地域は県の計画を受け入れた。用地買収に向けた準備が進む中、「個人的には問題意識を持っていても、地権者が賛成しているの代表として反対はできない」と40歳代男性は残念がる。

災害査定では当初、小泉海岸(中島海岸)に73億円、小泉川(津谷川)に154億円の復旧費用が認められている。

果も期待している。小泉地区で暮らす高校3年生の阿部正太郎君(17)はこの夏、東京海洋大学で開かれたシンポジウム「防潮堤問題から日本の未来を考える」に参加。被災地の報告者としてふるさとの現状を発表し、家族と毎年通った小泉海岸の楽しい思い出も語った。

「自分たちのまちで起きていることを知りたい」と、高校生では珍しく、小泉の未来を考える会や

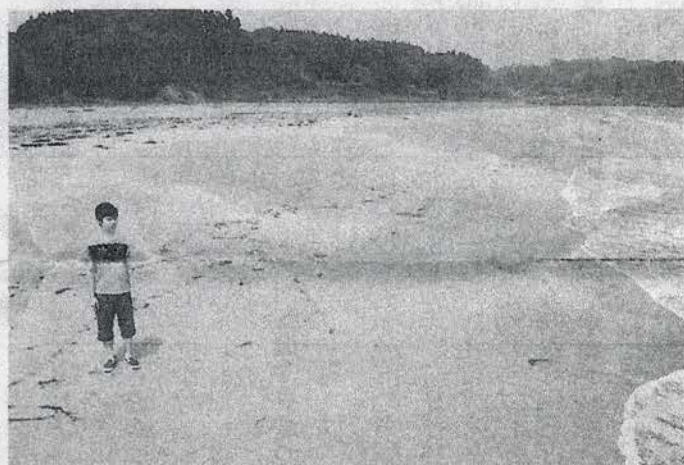
防潮堤を勉強する会にも参加してきた。そこで、同級生たちが知らない間に堤防計画が進んでいることに疑問を感じたという。

「堤防は必要だけど、この自然も地域の大切な資源で、いろいろの可能性があるとと思う」。震災後にできた砂浜を歩きながら、「震災前のように地域のつながりが復活すれば、そういうこともしっかり考えられるかもし

れない。それには時間が必要なんです」と話していた。

高校を卒業したら、大学でコミュニケーションデザインを学ぼうと考えている。目指しているのは「行政と地域がケンカしないで話し合うためのコーディネーターのような人」。大好きな小泉の未来のために勉強して、「いつか絶対に帰ってきたい」。

(今川悟)



県内最大の堤防が計画されている小泉海岸

小泉海岸

県内最大の14.7㍎  
表面はコンクリート  
県「国道からの見た目だけでも」